わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―― 144

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

魚の痛み人の痛み

「魚は痛みを感じるか？」という本がある。

イギリス人女性による著書で、日本では2012年に出版されている。東海林さだお氏のエッセーで知り、早速購入、興味津々で読んでみた。

誰もが一度は思う疑問、つまり魚も痛みを感じるのだろうか、との問いについて、これほど真摯に、これほど科学者らしいストイックさで臨んだ人がいるとは…。

結論からいえば、やはりというか、本当に？というか、魚も痛みを感じるらしい。

何せ、痛いか痛くないか、聞いてみることもできない。これが犬や猫の場合であればまだわかりやすい。長年の付き合いなら表情も読み取れるし、何といっても同じ哺乳類なのだから、比較的近しい存在である。

ところが、魚は、といえば、頻繁に食べる機会はあるにしろ、表情がなく声をあげることもないために、痛いのかどうかさっぱりわからない。釣りが好きな人なら多少は感じるものがあるのかもしれないが、逆に、釣り好きの人なら、魚が痛みを感じるとは思いたくないだろう。釣り針にかかって、体をくねらせ暴れる様子を見ても、それは痛いからではなく単なる生理反応に過ぎないと自分に言い聞かせてきた人も多いのではないだろうか。

ともあれ、魚も痛みを感じるというのがこの著書の結論である。実験に使う魚の選定理由や実験のプロセスなど事細かなハードルを超えた貴重な結果だ。それはそれで説得力ある内容であった。肝心なのはその先。著者は、それがわかったからといって、ならばどうしたらいいかという次の段階にまで踏み込んでいる。

それが「動物福祉」と呼ばれる分野だ。魚が痛みを感じるからといって、釣りを止めるだの魚を食べないだの、そういうことではなく、魚の苦痛を最小限にする釣り針や包丁の入れ方などを考え実践していくことこそが、本書の目的でもあるという。例えば、刺身を好む日本では、苦痛なく魚に即死をもたらすために頭を一撃する。その点を著者は高く評価しているのだ。なるほど…。恥ずかしながら動物福祉という言葉もはじめて耳にし、新鮮な気持ちになったことは確かである。

同じ頃、新聞報道に踊った「いじめ過去最多」の文字が目を引いた。さらに「失神ゲーム」あるいは「気絶ゲーム」と呼ばれる遊びが流行していることを知り、驚愕した。自分の、あるいはいじめ相手の胸を強く押して意識をなくした状態を楽しむ遊戯だという。アメリカでは死亡例が多数出ており、当然ながらいずれも犯罪行為に相当している。日本でも、中学生が仲間に強要し逮捕される事態が起こっている。しかし、ネットではその方法や実際や解説が動画としてたくさん流されており、その数なんと4000件だという。これでは、イスラム国が人質の処刑場面を公開するのと大差ないように思えてしまう。

魚の痛みについて真剣に考えている一方で、人間による人間に対する残虐な、恐れ知らずの行為の蔓延に言葉がない。かつて、授業の一環としてカエルや鮒を解剖した。子どもならではの好奇心とともに、「ごめんね」と心の中で合掌したのはそれほど遠い時代ではない。

いつか天罰が下りる…。平凡な表現だが、そう思わずにはいられない。作り物のホラー映画など比べものにならないくらい怖いことが、日々起こっている。

イラスト・伊藤栄章